

風姿花伝第三、問答条々 五 能の得手々々

問。能に得手く^{えて}とて、殊^{こと}
の外に劣^をりたる為手^{して}も、一
向^むき上手に勝^{まさ}りたる所あ
り。これを、上手の為ぬ^せは、
叶^{かな}わぬやらん、また、為^すま
じき事にて為ぬ^せやらん。

〔口訳〕 問。能芸に於て、人それぞれに得意とする所があつて、全般的にいへば殊の外に劣つて居る為手でも、その得手の一方面だけは、上手よりも勝つて居るところを持つて居る者があります。これを上手な為手が学んで我が芸としないのは、出来ない為でありますか、或は又、してはいけない為にしないのでありませうか。

答。一切の事に、得手^えとて、生得^{しやうとく}得たる所あるものなり。位^{くらい}は勝りたれども、是^{これ}は叶^{かな}わぬ事あり。さりながら、これもたゞ、よきほどの上手の事にての料^{れう}簡^{けん}なり。まことに、能と

答。能に限らず、一切の事に、得手々といつて、生れつき得意な所があるものだ。位から言へば上位の為手でも、下手の得意芸に対しては及ばぬ事がある。しかしながら、これもただ普通の上手といはれる程度の為手について考へ方に過ぎない。真に芸能の方面にも工夫公案の方面にも究めつくした上手であるならば、如何なる方面の芸も必ず演じ得る筈である。下手の得意芸に及ばぬといふのは、能と工夫との両面を究めつくした為手といふものは、万人の中に一人も無いから、

工夫との究^{きわ}まりたらん上手は、何^{なに}か何^{いづ}れの向^むきをも為^せざらむ。されば、能と工夫とを究^{きわ}めたる為^{して}手、万人が中に一人も無^なき故也。無^なきとは、工夫は無^なくて、慢^{まん}心ある故^{ゆえ}なり。抑、聖人

そのために起る現象なのである。自分が、万人の中に一人も無いと言つたのは、誰人も、工夫をこらすことをしないで自分の芸に慢心する心があるからである。諺にも「聖人の一失、愚人の一得」といふのがある。上手だつて欠点はあるし、下手だつて長所は必ずあるものなのだ。所がこれを見真に見る人がない。又当人もそれを自覚しないで居る。上手な者は自分の名望を憑み、自分の芸達者に蔽はれて、自分の欠点を知らないである。又下手な者は、工夫をこらすといふ事をやらないから、

の一疾^失、愚人の一徳^得と申事^{まうすこと}あり。

上手にも悪^{わる}き所あり、

下手^{へた}にも善^よき所、かならず

有^ある物也。是^みを見る人もな

し。主^{ぬし}も知らず。上手は名

を憑^{たの}み、達者^{かく}に隠されて、

悪^{わる}き所を知らず。下手^{へた}は、

工夫なければ、悪^{わる}き所を

も知らねば、善^よき所のたま

く有^あるをも、弁^{わきま}へず。さ

れば上手も下手も、互^{たが}ひに

人に尋^{たづ}ぬべし。乍^{さりながら}去、能と

工夫^{きは}を究めたらむ者、これ

を知るべし。

自分の欠点の自覚がない。そんな状態だから、自分にたまたま長所があつても、それを知らないである。かやうなのが世の有様だ。だから、上手も下手も、互に他人の意見を聞いて、反省工夫の助けとしなくてはならない。しかし、真に能と工夫とを究めつくした為手ならば、これを知ることが出来ると思ふ。

いかなる可笑しき為手なり

とも、善き所ありと見ば、

上手もこれを学ぶべし。こ

れ第一の手だてなり。若し

よき所を見たりとも、我よ

り下手をば似すまじきと思

ふ諍識あらば、その心に繋

縛せられて、我わろき所と

も、いかさま知るまじきな

り。是則究めぬ心なるべ

し。又、下手も、上手の

悪き所若し見えば、「上手

だにも悪き所あり、況んや

初心の我なれば、さこそ、

どんなにつまらぬ為手の芸でも、あ

すこは良い所だと見たならば、上手と

いはれる為手も、これを学ぶべきであ

る。これは自己の芸を伸ばしてゆく第

一の手だてである。良い所を見ても、

自分よりも下手な者の芸は似せまいな

どと思ふ諍識が若しあつたならば、そ

の人は直に自分の諍識によつて自分が

束縛せられて、それが自分の大欠点だ

といふことも、恐らく気づかないだら

う。かやうなのが即ち「工夫を究めぬ

心」なのである。又下手な者も、万

一上手な人の芸の欠点に気がついたなら

悪^{わる}き所^{ところ}多^{おほ}かるらめ」と思^{おも}ひ
て、是^{これ}を恐^{おそ}れて、人^{ひと}にも尋^{たづ}
ね、工夫^{こうふ}を致^{いた}さば、弥^{いよ}稽^{けい}
古^こになりて、能^はは速^{はや}く上^あが
るべし。若^{もし}さはなくて、我^{われ}
は、彼^{あれ}体^{てい}に悪^{わる}き所^{ところ}をば、為^す
まじき物^{もの}をと、慢^{まん}心^{しん}あら

をも良いかのやうに思ふものである。
そんな風だから、いくら年を経ても能
は上達しないのである。これ即ち下手
の根性なのだ。

ば、我^{われ}善^よき所^{ところ}をも、真^ま実^{じつ}知^し
らぬ為^{ため}手^てなるべし。吉^{よき}所^{ところ}を
知^しらぬは、悪^{わる}き所^{ところ}をも善^よし
と思^{おも}ふなり。さるほどに、
年^{とし}は行^ゆけども、能^はは上^あがら
ぬなり。これ則^{すなはち}、下^へ手^たの心^{しん}
なり。

されば上手にだにも、じやうまん 諍慢
あらば悪わるかるべし。いは 況んや、
叶かなはぬ諍識じやうしきをや。よくくこうあん 能々公案
して思おもへ、上手は下手へたの手
本、へたは上手の手本なり
と工夫すべし。下手へたの善よき
所ところを取とりて、上手の物数ものかずに入い

だから、上手な者でさへも諍慢心があれば、それは大変いけないことである。況んや叶はぬ下手者の諍識に於てをやである。十分に工夫省察して見よ、上手は下手の手本、下手は上手の手本だと思つて、工夫をこらすが良い。下手の者の良い長所を採り学んで、上手がこれを自己の芸能の中に摂取することは、無上至極の理りである。他人の悪い所を見ることができへ、自分の欠点を直す手本になるのだ。況んや良い所を見てこれを学ぶ事が、如何に良き手本であるかは説明を要しないであ

る事、無上至極ごとうりの理なり。
人の悪わるき所を見るだにも、
我手本わがてほんなり。いは 況んや、善よき
所をや。つよ 稽古は強かれ、諍じやう
識しきは無なかれとは、是なるべし。

らう。花伝書の序に、「稽古は強かれ、諍識は無かれ」と戒めてあるのは、この点についての教戒であらう。

此の段の眼目は「能と工夫とを究めつくす」といふ点にある。それを実行に移す時に、妨げとなるものは諍識や慢心である。所がこの諍識や慢心の無いものは、悲しい哉万人の中に一人も無いのである。我々自身冷静に我身をふりかへつて見た時、正視するに堪へないこの種の雑念が、我々の心の底に蠢動しつつあることを感じる。これは免れ難い人間の運命だと思ふ。ただこれを跳梁せしめないで置くといふことが、許されるかと思ふ。陽明が山中の賊を破るは易いが、心中の賊を平げるは難いと歎息したといふ。陽明すら然りだ。

問題は卑近な所から出てゐる。下手な為手の長所を、上手が一向に真似ようとしなないのは、どうしたわけかといふ質問である。学ぶべきものがありながら学ばないといふのは、諍識のわざである。自分の方がすぐれてゐると自惚れる慢心のわざである。諍慢の心が自分の明を蔽ふと、自分の欠点が見えなくなる。そればかりでない。「慢心あらば、我が善き所をも真実知らぬ為手となる」といふ。この一語は実に深遠である。一寸考へると、自惚れるといふことは、自己の良い所が目につきわかりすぎてゐる故に、起るかのやうに思はれる。いくら慢心しても、自分の長所を見失ふといふやうなことは無からうと思ふ。しかし、

世阿弥は「良き所を知らぬは悪き所をも善しと思ふなり」といふ。これを逆にして「悪き所をも良しと思ふは、良き所を知らぬなり」とすれば、非常に明かである。自己の欠点に目がつかぬのでなくて、欠点を欠点と自覚せず、それで良いものの如く思ふ心は、冷静に反省して見ると、良き所を知らぬ歪んだ心であるのだ。慢心の害毒はかくまでに恐るべきものである。

これから逃れて正道を進むには、ただ工夫省察の一途あるのみである。「上手は下手の手本、下手は上手の手本なり」と工夫をこらすにある。

「人の悪き所を見るだにも我が手本なり、況んや善き所をや」である。この心をもつて修行したならば決して邪慢にはなり得ないと思ふ。